

# オーボエ演奏における指導について

## THE TEACHING OF PLAYING THE OBOE

米 山 龍 介 (音楽教室)

Ryusuke YONEYAMA

### 抄 録

本稿は音楽に必要な音程・リズム・ハーモニーを、オーボエの演奏という観点を通してどのように体得するのかを論じたものである。

キーワード：器楽，管弦楽，吹奏楽，アンサンブル

### 1. はじめに

かつては“特殊楽器”とまで言われたオーボエが，現在では中学校・高等学校のブラスバンドやオーケストラまたは，県民・市民のブラスバンドやオーケストラに至るまでほとんどの団体で使われるようになってきた。つまり，“特殊”ではなく“ポピュラー”になったと言えるようになってきたわけである。このような状況下において，とりわけ“演奏が難しい”と言われているオーボエの指導について論じ，表現方法の一考察としたい。

### 2. オーボエという楽器について

#### ① 材 質

黒檀の一種であるグラナディアで作られたものがほとんどであるが，そのグラナディアもアフリカ産のものばかりではなく，南米産のものも多くなった。また，近年は，紫檀系のキングウッド，ローズウッド，バイオレットウッド，コークスウッド，ココボロ等と様々な材質が使用されるようになってきた。グラナディアが“黒色”なのに対してキングウッド等の楽器は紫檀系なので遠目には“焦げ茶色”に見える。これは演奏者の楽器の色に対するバリエーションからきたものというよりは，音色に対するバリエーションの変化によるものだといえる。

そもそもルネサンス時代からバロック時代にかけての木管楽器は，材木からの削り出しが柔らかい材質のものの方が容易だったこともあり茶系統のものが多く，それは副産物として非常に柔らかい音色をもたらした。そしてそれらの活躍の場はソロ・ソナタであり，トリオ・ソナタであり，室内管弦楽等のいわゆる室内楽においてであった。オーボエもその最たる例のひとつである。

“柔らかい音色”や“適度な音量”と，現代において考えられるところの非常にデリケートな特色が持ち味であった当時の楽器は，その後古典派・ロマン派等と時代が進むにつれて様々な改良が加えられるのである。つまり，工作技術の進歩もさることながら，音楽表現の規模が大きくなるに伴って“大きな音量”のする楽器，“鋭い音質”の楽器，“確実な音程”のとれる楽器が求

められるようになった。その結果、固く密度が高いグラナディラが使用されるようになったわけである。

しかし、いつの時代でも聴衆は音楽に“ぬくもり”を感じようとするし、演奏者は“柔らかい音”を醸し出そうとするものである。その表れが近年の紫檀系の楽器の再来である。この紫檀系の楽器の出現は、柔らかい材質であるがゆえに密度が“疎”の状態である木材を精密加工（特にボアの中削り・トーンホールのエッジの部分の削り出し等100分の1mm単位の精度が要求される）するという技術の発展に裏打ちされた賜物であり、そのボディーの焦げ茶色にマッチするようにキーもゴールドのものが多く、ただの懷古趣味ではなく、音楽づくりにおいても今後ますます需要と供給のバランスのにおいても世界中に広がっていくと思われる。

以上の楽器はいわゆるプロモデルやカスタムモデルと呼ばれるものであって、パレードや体育大会等の屋外演奏が多い団体にはクラックの入らないシンプルな作りのプラスチックのものがベターである。

## ② 組み立て方

オーボエは楽器本体としては、上管・下管・ベルの部分に分かれる。そして最上部にリードを差し込んで演奏する。まず、下管のコルクにグリスを適度に塗り、ベルを少しずつ回転させながら差し込む。その際ベルから飛び出しているB♭キーのジョイントを曲げないように注意して横から見て下管のジョイントが下の部分に、ベルのジョイントが上に来るように連結する。そして、それらのキーを真上から見て一直線になるよう調整する。楽器を組み立てる上で最も大切なのは、楽器を支える手でキーを握らないことである。オーボエのキーは洋銀で作られていることが多く、大変柔らかいので不用意に握ることによってキーを曲げてしまうこともあるのである。それを防ぐためには、キーの設置されていない部分のボディー（グラナディラ）そのものを手のひら全体で包み込むように握ることである。

次に上管のコルクに適度のグリスを塗った後、ジョイントされた下管とベルが一体になった状態で、ベルのボディーを右手で支え、左手に上管を持って少しずつ回転させながら差し込む。その際下管から飛び出しているFisキーのジョイントとC-Dトリルキーのジョイントを曲げないように注意して横から見てそれぞれ上管のジョイントの下の部分に来るように連結する。やはり、それらのキーを真上から見て一直線になるよう調整する。ここでは、C-DトリルキーのジョイントよりFisキーのジョイントの方を優先的に調整する。なぜならば、これはC・H・B♭の音程を左右する重要なキーだからである。

## 3. リード

### ① 削り方の種類

オーボエは楽器の先端に取り付けられた、リードという草笛の音がする発音体を口にくわえて演奏する楽器である。そのリードは、遠く南フランスのプロヴァンス地方で採れた“葦”を材料に演奏者自身が削って作る。材料はケーンと呼ばれ、削られた2枚重ねのケーンを発音するところから、オーボエのことをダブルリード楽器とも呼ばれている。

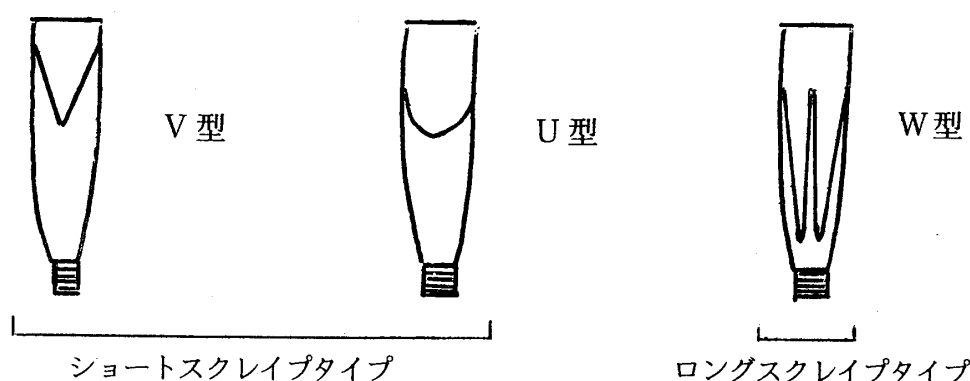
世界中のオーボエ奏者のリードの削り方をグローバルにみると地域的観点から（ア）フレンチスタイル、（イ）ジャーマンスタイル、（ウ）アメリカンスタイルの3種類に大別される。

また、削り取った部分の形状から、それぞれ（ア）フレンチスタイルのことを（ア'）V型、（イ）ジャーマンスタイルのことを（イ'）U型、（ウ）アメリカンスタイルのことを（ウ'）W型とも呼ばれている。

さらに、その表皮を削り取った部分のことをスクレイプと呼び、その長さから（ア）フレンチスタイルと（イ）ジャーマンスタイルの両方を「ショートスクレイプタイプ」、（ウ）アメリカンスタイルの方を「ロングスクレイプタイプ」という類別もされている。

図1

（ア） フレンチスタイル      （イ） ジャーマンスタイル      （ウ） アメリカンスタイル



このリードの削り方による音色の相違と言うのは、人間に例えると顔や肉声が一人一人異なるのと同じである。すなわち（ア）フレンチスタイルでは明るくて少し細い音、（イ）ジャーマンスタイルでは暗くて太い音、（ウ）アメリカンスタイルでは全体に鼻にかかって真っすぐな音というように人間の声帯に似たところがある。

話を転じてみると、世界中のオーケストラのそれ自体が備え持っている音色はオーボエの音色によって決定されると言っても過言ではないと考える。なぜならば、それほど違いの出るリードをオーボエ奏者は自分自身で製作しなければならないからである。演奏者自身が育った環境、感性、音楽感、それにオーケストラの要求等等により結果として大変な違いが表出してくるのである。20年程前までの各国のオーケストラはこの違いが非常に顕著であったが、最近の世界中を駆け巡る情報メディア、交通メディアの急速な発達によるインターナショナル化はその個性をも奪おうとしている。従って音質においても国別の顕著な差がほとんど無くなってしまった。誠に憂えるべき状況である。

そこで大いに考慮しなければならないのが日本の場合である。我が国日本では、古来“雅楽”で使用されている“箏（ひちりき）”にオーボエのルーツをみることができる。メロディーラインを受け持つ音量豊かなこの楽器は、皇族あるいは神社等の宮廷音楽の中で、また世俗的には庶民の間でチャルメラに形を変え伝承されてきた。このような中で日本のオーボエの音色はどの分類に当てはまるかという、現状は“混沌”とした状態であるといえる。“日本の音”が待ち望まれる。

## ② くわえ方

全ての場合、まずリードを角の部分を欠かさないように舌で受け止めてからくわえる。その後上下の歯にそれぞれ上唇・下唇をちょうどクッションのように少しずつ巻き込みスクレイプ（削り取ってある部分）までくわえる。そのくわえた時の感触は、ちょうどストローを使ってジュースを飲む感覚に似ている。柔らかくくわえ過ぎるとそのストローは唇から落ちるし、固くくわえ過ぎるとジュースは口に入ってきて来ない。即ちリードの中へ息が通らなくなる状態である。上下の開きが僅か1mm足らずのリードを噛んでしまい息を通らなくすることが最も良くない。また、口腔内は熱いものを頬張った時の状態と同じにする。つまり、口腔内の容積を広げることでリードの共鳴を多くしてやり、多くの倍音を誘発させるのである。これは音色に大いに影響することになる。

## ③ リードのみの音出し

オーボエの本体に差し込んで演奏する前に事前練習としてリードだけを鳴らしてみる。フルートやクラリネットと異なり、かなり速いスピードの呼気が要求される。H～B♭～Cの音程を一定に保てるよう何回も練習する。その際、草笛を吹くような要領でタンギング（舌突き）も含めて練習すると良い。これらの音程が出せるようになったらいよいよオーボエの上管のソケット部に、リードの糸を巻いてある部分とコルクの部分の境を指で挟んで差し込む。その際、楽器本体の組み立て時と同じようにコルクにグリースを塗っておくとスムーズに差し込むことができる。

# 4. 注意すべき音程

ひとくちに言ってオーボエは低音も高音も出しにくい楽器である。Low F～Low B♭までは下がりぎみになるし、さらにPPが出しにくい。Middle E～Middle Gまでは第1オクターブキーを使う音域で、充分な呼気の圧力が必要になる。また、High A～High Cまでは第1オクターブキーと第2オクターブキー両方を使う音域になりさらにスピードのある呼気が必要になる。High D～High Gまでのハーモニックスを吹く場合、オクターブキーは第3オクターブキーのみとなるが、オーボエの最高音域になり呼気の圧力と音程とのバランス、それに指使いが大変難しくなる。

初心者は第2オクターブキーを使う音域に留めたい。何故ならば、音を出すことに熱中する余りリードをくわえる唇（アンブシュア）の崩れに気が付かず、悪い方向に行きやすいからである。

# 5. 注意すべき指使い

オーボエと指使いが似ており、学生・生徒が今までに勉強したことのある“笛”は何かということで、一番分かりやすい指使いをするのが“ソプラノリコーダー”である。従って、オーボエとこの楽器との特に相違する点を対比しながら考察する。（注. オーボエはコンセールバトワールシステムの楽器）

## ① Low F

ソプラノリコーダーでは右手2指のみだが、オーボエでは右手2指でFisキー・右手3指でEキー・右手4指でバナナキーを押さえないといけない。

## ② Middle C

ソプラノリコーダーでは左手3指・左手1指だが、オーボエでは左手2指でHキー・右手2指Fisキーを押さえないといけない。

## ③ Middle D

ソプラノリコーダーでは左手3指のみだが、オーボエではLow Dと同じく左手2指でHキー・左手3指でAキー・左手4指でGキー・右手2指でFisキー・右手3指でEキー・右手4指でDキーを押さえないといけないが、Low Dと異なり、左手2指のHキーを“指を滑らせる”ことによって半開きの状態にしなければならない。

## ④ Middle E

ソプラノリコーダーでは楽器の表側をEの指使いにして裏側の左手1指をサミングというトンホールの隙間を作るような押さえ方をする。オーボエではMiddle Dで動かした左手2指の半開きを元に戻して閉じ、リコーダーと同じように表側をEの指使いにする。しかし、裏側の左手1指はリコーダーと異なり、第1オクターブキーを押さえるが、その際、呼気の圧力が弱いと1オクターブ下のEが出てしまうので幾分増すようにする。

## ⑤ High A ~ High C

基本的にはLow A ~ Middle Cまでと同じだが、左手1指で第1オクターブキーを押さえたまま、さらに第2オクターブキーを左手2指の第2関節・第3関節の間の側面を使い、横から左手首を回転させる要領で押さえる。

## 6. リズム

以下のようなフレーズの場合それぞれのパターンでゆっくりとしたテンポから練習する。

図 2

①

↓リズムパターン化

Méthode pour hautbois ou saxophone  
J. SELLNER, 14ページより

パターン1

パターン2

パターン3

パターン4

パターン5

パターン6

パターン7

②

↓リズムパターン化

Méthode pour hautbois ou saxophone  
J. SELLNER, 17ページより

パターン1

パターン2

パターン3

パターン4

パターン5

パターン6

## 7. 息 継 ぎ

他のあらゆる吹奏楽器が息継ぎ（プレス）において空気をたくさん吸い込むだけの動作で良かったのに対し、オーボエは独特のコントロールを要する。

先述したリードの僅か1mm弱の2枚の隙間を呼気が通過し発音する楽器であるため、音になる呼気は少量でよく、一つのフレーズを吹き終わっても肺にはまだ空気が残っている。この残った空気を捨てる事なく次の息継ぎをすると、息を吸っているようで実は残った空気だけが蓄積され続けるに過ぎない状態になってくる。これは実際、吸えていないことに外ならない。呼気ははき出しきれず、どんどん蓄積されていった結果、いわゆる“酸欠”になる。

これを防ぐためには、息継ぎの前で必ず肺に残った空気を一瞬のうちに腹筋と横隔膜を使い、水泳で用いるプレスの要領で思いきり良く、はき出してしまわなければならない。そうすれば、その反動として大気と体内圧のバランスで新鮮な吸気の流入が促される。

プレスコントロールの方法としては、オーボエの練習時に“はく息継ぎ”と“吸う息継ぎ”の場所を曲のフレーズごとに確定しておくトラブルが少ない。

## 8. ハーモニー

以上のようなステップを経て音がある程度出せるようになったらオーボエ二重奏でハーモニー感を養う。ピアノでは一つの音を瞬時に上げ下げできないが、オーボエでは曲の調性を理解することによって必要な、しかも微妙な音程の調節が可能になる。純正的なハーモニーの体験、これが作音楽器のメリットである。

教材としては、演奏可能な音域を考えて誰しもが知っている曲を使う。

① Edelweiss (エーデルワイス)

楽譜例 1

**Edelweiss**  
(エーデルワイス)

R. ロジャーズ 作曲

♩ = 112 ~ 128

中学生の器楽、市川都志春、音楽の友社、1993、18 ページより

## 9. おわりに

日々様々な演奏に接すると「本当に音楽をする喜びをもって演奏しているのか」と疑問に思われることがしばしばある。技術的な面はさておいても「心から自分の思い・主張を伝えたい」というような姿勢が少々欠如しているのではなかろうか。また、音を発する直前の準備（気持ちを込めた、あるいは狙いすました等の）が確実にできているのか等の疑問が湧いてきた。音楽

的な音を出そうとする努力、調和のとれた音程・ハーモニーは既に完成楽器とされているピアノ等の鍵盤楽器だけでは完全には養われない。さらに言うと、音楽をする時の緊張感（音程の調節、音量・音質のバランス感覚）を創造的に体得させたい、というのが、本学でオーボエを授業に取り入れた理由である。

“作音楽器”であるオーボエはまず、リードという音を発するためのハードルをクリアしなければならないし、音程への多大な努力が必要であるし、呼吸を使ってフレーズを作らなければならない。いわゆる面倒で大変な楽器である。しかし、本学の学生をみていると初心者でも半年も経って来ると、アンサンブルをやってみたいとの申し出がある。勿論主張のぶつかり合いや技術の未熟さがあるので完璧とはいかないが、人と合わせることによって、少しでも音楽をする喜びの一端を体得できたからなのではないかと考えている。

### 引用・参考文献

- 1) エヴリン・ロスウェル著、西岡信雄訳、オーボエのテクニック、音楽の友社、1978,
- 2) Joseph SELLNER著、L.BLEUZET改訂、Méthode pour hautbois ou saxophone, EDITIONS M.R.BRAUN、PARIS, 1972,
- 3) 市川都志春著、中学生の器楽、音楽の友社、1993,
- 4) 米山龍介著、「教育学部音楽科における実技と理論の関連性」、和歌山大学平成4年度学内特別研究報告、10～15頁、和歌山大学、1993,